続・「英語落語」が授業にやってきた：中学校英語検定教科書における使用例を考察する

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: FUJISAWA, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4064

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

続・「英語落語」が授業にやってきた

－中学校英語検定教科書における使用例を考察する－

学芸学部 国際英語学科
藤澤 良行　Yoshiyuki FUJISAWA

要旨：2016 年 4 月より使用されている現行の中学校英語検定教科書は全部で 6 種類あるが、その内の 4 種の教科書に日本文化の発信材料として「英語落語」が採用されている。本稿では、それぞれの教科書で「英語落語」がどのように使用されているかについて考察している。それぞれの教科書で「英語落語」の使用意図が 4 技能別に少しずつ異なるのが特徴的である。これを踏まえて、「アクティブ・ラーニング」の観点から「英語落語」の英語教育への貢献の可能性を示唆する。

キーワード：英語落語、中学校英語検定教科書、4 技能、アクティブ・ラーニング

はじめに

本稿は、藤澤（2013）に続くもので、前稿では、2013 年度から使用された中学校英語検定教科書（以下、旧版と呼ぶ）における「英語落語」の使用例についてまとめた。本稿は 2016 年度から新しく使用されている中学校英語検定教科書（以下、新版と呼ぶ）における「英語落語」の使用例に対しての考察である。

雑誌 『英語教育』2016 年 2 月号における、2016 年度から新しく使用される中学校英語検定教科書の教材のトピックについての調査[1]によれば、全部で 6 種類ある中学校英語検定教科書のうち、4 種のものに「英語落語」が取り上げられていることが報告されている。このリストに掲げられている項目のうち「日本・伝統文化」の項目においては最多である。これは、それほどに「英語落語」が英語教育（特に中学校）において注目をされていることを示すものである。ただし、この流れは今回の教科書改編で急に起こったわけではない。藤澤（2013）にもまとめた通り、旧版では３種の教科書に取り上げられていた。今回はその数がさらに１種増えており、「英語落語」の使用観点がさらに広がっていることがわかる。

そこで本稿では、新版において「英語落語」がどのように取り扱われているかについて取り上げ、「英語落語」が英語教育（特に中学校）に寄与するその可能性を示唆する。

以下順次各種の教科書を取り上げ、具体的にその使用例について考察する。

1. *New Horizon English Course 2*　(東京書籍)

Unit 6　*Rakugo* in English

藤澤 (2013:8) でも述べたように、*New Horizon* は 4 種の教科書のうち最も早い時期から「英語落語」を取り上げた教科書である。いわゆる日本文化の世界へ向けた発信として「英語落語」に注目した点でその先駆的役割は大きい。新版でも「世界に広がる伝統文化としての落語」という観点から Unit が構成されている。

大きな変化としては、旧版までは 3 年生の教科書に採録されていたが、新版では 2 年生の教科書での採録となっている。つまり、以前より易しい英語表現を用いて「英語落語」について説明をしていると言えよう。

文法事項としては、「There is (are) …」と「動名詞」がターゲットである。２年生の新出事項としては大切なところである。

Unit の構成は以下のとおりである。

6-1　Starting Out : 落語公演のポスター（ポスターの情報を読む）
6-2　Dialog: 光太と Alex の対話　　落語の説明（扇子と手拭いの使い方について）
6-3　Reading and Think 1: 英語落語会のパンフレット（パンフレットの情報の読み取り）
6-4　Reading and Think 2「まんじゅうこわい」のアレンジ（オリジナル版）(dialogue 形式のスクリプト)
6-5　Activity 「英語落語家への道」 桂かい枝へのインタビューを聞く（listening）

ここでは、リーディング素材として、ポスター、会話文、パンフレットの読み取りというテキストのバラエティーをもたせている点が工夫されている。

内容としては、日本文化を英語で紹介するその代表として落語という伝統芸能を扱うことで、他の日本文化の事象についても同様に英語による発信ができるように構成されている。たとえば、この Unit の Part 2 では､落語に使用される小道具の扇子と手拭いを使い、どのような動作を表現することができるかを考えさせる。扇子で箸を表現し麺類を食べる仕草をしたり、扇子と手拭いを用いて筆と帳面を表現し、手紙を書く動作を表現したりする。このように、動作をともなって英語で表現すればその表現はより定着しやすくなるのである。

この教科書には残念ながら「英語落語」の本格的なスクリプトは掲載されていないが、Part 4 において dialogue 形式で落語「まんじゅうこわい」の短縮アレンジ版（自分が嫌いな食べ物を言い合う対話）が掲載されている。英語版において改作されたオチのセリフ “I’m scared of milk, too”「ミルクも怖い」の意味合いを考えさせること、そしてその考察を「アクティブ・ラーニング」として生徒同士の話し合いによって深めていくことがここでのリーディング活動の目標となる。

最後にリスニング練習として上方落語家の桂かい枝のインタビューを聴き、彼がいかに英語落語に挑戦することになったか、そして彼の海外公演でどのような経験をしたのかを、ワークシートを用いて聴き取ることになる。「アクティブ・ラーニング」の観点から、グループで相談しながら各自が聞き取った情報をお互いで補完し、充実させる活動も考えられる。

4 技能のバランスから言うと、この課では題材のリーディングとリスニングが中心になるが、文法項目を踏まえたスピーキングやライティングの練習も取り入れられている。リスニングパートの「まんじゅうこわい」のスクリプトを発音練習することでスピーキングへの応用も用意されることになる。

この教科書に採録された素材からだけでは、実際に「英語落語」そのものがどのようなものか、全体を理解することは容易ではないが、その部分は映像素材を利用することなどで補うことが可能であろう。

2.　*New Crown English Series 3*（三省堂）

Lesson 3　*Rakugo* Goes Overseas

旧版から新しく「英語落語」を取り入れているが、前回と同様、３年生対象の Unit3 において、本教科書の編著者グループの一員である大島希巳江を登場人物として取り上げられている。日本文化の発信を主旨としたレッスン編成の中で、英語落語家としての大島の海外公演が現地でどのように受容されるかが話題の中心となる。

題材としては「世界にはばたく伝統芸能としての落語」であり、文法項目としては、「I have just finished ~./ Tom has visited ~ once./ (be glad to ~)」がターゲットとなる。これは旧版と変わっていないところである。

各パートの構成は以下の通りである。

Part 1 [Get]　Ken & Emma による対話　英語落語会へのお誘い(dialogue)
Part 2 [Get]　大島による落語についての説明（高座のマクラとしての口演）(monologue)
USE→Read　大島へのインタビュー記事
Let’s Listen　英語落語｢時そば｣を聴いて、メモを取る（スクリプトなし）

海外での大島による英語落語公演を踏まえた形で、落語をまだ聞いたことのない海外の 2 人の若者が初めて落語会に出かけることを出発点とし、大島による英語での落語の説明（2 人が実際に落語会に出かけて大島の高座を見ている設定である）と、大島のインタビュー（海外公演を始めた動機、海外での経験、今後の抱負が語られる）を読むことになる。これを読めば、海外での英語落語公演の反響がよくわかり、日本文化を実際に海外で発信している様子が伝わってくる。素材としては、ポスター、対話文、一人による語り（ナラティブ）、インタビュー記事と、変化に富んだリーディングマテリアルの構成である。

旧版には「英語落語」の実例として英語小咄が一つ掲載されていたが、新版ではそれが削除されている。その理由としては、旧版では英語小咄を「英語落語」の見本として掲載する意図があったと思われるが、小咄一つだけでは中途半端で、この小咄について実際の授業での取扱いが難しかったのだと想像される。

これを補う意図であろうが､新しく Let's Listen のパートで、英語落語「時そば」を聴く活動が組み込まれた。これにより生徒は実際に「英語落語」とはどのようなものかを知ることになる。教科書にはリスニング学習のワークシートのみで、落語の英語スクリプトは掲載されていない。スクリプトを掲載しないことで全文を一つ一つ和訳することにとらわれず、ワークシートを手がかりとしながら、話の流れの中で面白いとこ

ろを聴き取る練習（いわゆるトップダウン型の聞き取り練習）になるともいえるので、それはそれで一つの方針である。ワークシートを踏まえてグループワークとして落語の内容を確認し合う「アクティブ・ラーニング」型の活動も考えられる。もちろん補助資料として「時そば」のスクリプトは指導書に準備されており、噺の大筋を掴んでからそれを配付することにより、逆に細部への注目を含めたボトムアップ型の聴き取り練習に進むことも可能であろう。また「時そば」の映像素材（英語版でも日本語版でも）を利用することもありうる。

4 技能のバランスから言うと、「英語落語」についてのリーディングとリスニング活動が中心となるが、練習問題として日本的な事物を英語で表現する（書く、話す）活動が用意されている。大きな観点でいえば、大島が落語の伝道者として世界に出るのを見習い、落語以外の日本文化の発信を生徒ができるように奨励されているということも言えよう。

3. *One World English Course 3*（教育出版）

Unit 3　Our First *Rakugo* in English

New Crown と共に、前回の改訂から「英語落語」を本格的に取り上げた教科書である。ここでも桂かい枝を中心に据え、彼の海外での英語落語公演の経験を英語で学び、さらに英語落語 「The Zoo（動物園）」のスクリプトがそれに続く。

題材としては「日本の伝統文化：桂かい枝さんの英語落語」であり、文法項目としては、不定詞(It ～for … to do、疑問詞＋to do、want … to do)、および間接疑問文がターゲットである。これは旧版をそのまま引き継いでいる。

各パートの構成は以下の通りである。

Part 1 (Hop) 桂かい枝の海外公演の経験を読む（monologue）
Part 2 (Hop)　その続きを読む (monologue)
Part 3 (Step) 「動物園(The Zoo)」のスクリプトその 1
Part 4 (Step) 「動物園(The Zoo)」のスクリプトその 2 オチを記載せず生徒に考えさせる活動あり
(Jump)「動物園」のストーリーの要約と桂かい枝のプロフィールを読んでダイアローグの下線部穴埋めの練習問題

New Crown での大島による海外公演での経験を伝える意図と同様に、こちらでは桂かい枝による海外公演での経験から日本の伝統文化を英語で伝える面白さと苦労が語られる。

旧版と同じく、新版にも英語落語「The Zoo（動物園）」のスクリプトが（必要最低限ではあるが落語として十分に成立している）全文掲載されているので、これを元に練習をして英語落語を実際に口演することができるところまで配慮されている。

旧版でも採用されていたのであるが、新版においても「動物園」のオチ(punch line)が空欄になっており、生徒同士で話し合い、内容にふさわしいオチを考案する「アクティブ・ラーニング」型の活動は継承されている。藤澤（2013：10）でも指摘した通り、協同学習としてこのように話し合う活動を組み込んでいるのは、「アクティブ・ラーニング」を意識しているところだと思われる。もちろん落語のネタとしては定まったオチがある（筆者が知る限り 2 種類ある）が、さらに創意工夫の余地があることを示し、生徒の自由な発想を引き出すきっかけとなる。答えは一つではないことに気づかせる大切な着眼であると言えよう。

旧版に取り入れられていた表現活動への指示(「気持ちを込めて」表現しよう）が新版で削除されているのは、藤澤(2013)でも指摘したのであるが、教員による適切な指示がないと教室の現場で扱うことは難しいということが考慮されたからかもしれない。しかし、音読活動としての「落語音読」は非常に有効であるので、授業者が工夫をして、生徒による「英語落語」の公演が教室において実現することは望ましいと考える。

4 技能のバランスから言うと、「英語落語」についてのモノローグと落語のスクリプトのリーディングとなり、他の教科書ほどバラエティーが富んだものにはなっていないが、一つの落語を丸ごと収録している点は高く評価できる。スクリプトを読む前に教科書を開けずに聴くことから始めれば、ストーリーを追うリスニング活動となる。スクリプトを音読すると発音練習に繋がり、口演できるほど繰り返し練習をすればプレゼンテーションの練習になる。ライティングについては、ストーリーの要約をすることで、機械的な和文英訳の練習から一歩進んだ練習になることが意図されている。

4. *Sunshine English Course 2*（開隆堂）

Program 4 (Reading)　Eigo *Rakugo*

これが今回の検定から新しく 2 年生に「英語落語」の課を取り入れている教科書である。ただ、他社のものを追随するのではなく、独自の観点から取り入れてい

るところに新味がある。

この課（この教科書では「プログラム」と呼ばれている）は復習(Review)のセクションで、「スキット作りを楽しもう」という My Project の後に配置されている。この My Project 活動では、生徒は対話の繋ぎ方を学び、対話のバリエーションを考えた後、実際にスキットを作り、ペアで演じる練習をしている。ペアごとの発表を録画し、自分たちで評価することも提案されている。2 人による単なる英文の読み合いではないところまで練習ができるかどうかがここでのポイントになる。

それを踏まえて、この課では「英語落語」を読むことに主眼が置かれており、Reading の素材として「英語小咄」が利用されている。復習の課であるので、特別な新出の文法事項はない。

各パートの構成は以下の通りである。

Part 1　英語小咄：'The Hammer'　（スクリプト）
Part 2　英語小咄：'A New Point of View'（スクリプト）

ここでは英語小咄を２つ読んで、それぞれの小咄のどこが面白いのか、オチの意味することは何かを考えることが活動の中心になる。場面のポイントごとに該当するセリフの横の位置に写真が配されているのは読解の手がかりとなろう。その写真であるが、プロの落語家による演技の写真ではなく、一般の子どもによる落語パフォーマンスの様子の写真であることにも注目したい。*Sunshine* 編集部によれば、プロではなく子どもが小咄を演じている写真を掲載した理由について、「生徒が英語を演じる際のよりモデルになる」[2]からとのことである。

この教科書での特徴的な扱いとして、従来高校の教科書には一部取り入れられたこともあるが、いわゆるリーディングのための読み物教材としての「英語落語」への着目がある。物語が人物の対話として展開していくので、ストーリーを追いながら読む進めることが容易になっている。

英語での内容の要約練習と共に、2 つの小咄のどこが面白いポイントなのかを考えることは大切なリーディング活動と言える。この面白さの発見こそが読み取るべき中心であり、それを生徒同士で話し合うことで、「アクティブ・ラーニング」につながると考えられる。

この教科書での「英語落語」の扱いは、4 技能のうちリーディングに主眼をおくものであるが、スクリプトを利用した発音練習をくりかえしてプレゼンテーションへと繋がるヒントも与えられている。ただ、課の終わりに、Challenge「演じてみよう！」として、「落語家になったつもりで演じてみましょう。」という指示があるが、藤澤(2013)でも指摘したとおり、この指示だけで口演できるようになるところまで進むのは極めて難しい。そのあたりは指導書での教員への適切な指導のヒントの提案を望みたいところである。

おわりに

なぜこれほどまでに「英語落語」が中学英語検定教科書において注目されているのだろうか。

落語は極めて日本的な伝統芸能である。一人語りの話芸は世界中に存在する（“Stand-up Comedy” と呼ばれる）が、高座で座布団の上に座り、右方向左方向に顔を向けて（上下（かみしも）を切ると呼ばれる）ダイアローグを表現するのは落語独特の形式である（外国での説明のために、落語は “Sit-down Comedy”と名乗ることもある）。分かりやすい英語で世界中を口演して回っている落語家たちの活躍が教科書への採録の背景にある。彼らの実践がまさに日本文化の発信であり、異文化交流の一つの手段である。「英語落語」に留まらず、日本文化を世界に発信するその精神を中学生に持たせたいという考え方である。

さらに、型はまりな授業にとどまらず、教室に笑いを取り入れることの効果は大きいと考える。生徒同士で協同して面白さを発見すること、また「英語落語」を演じる機会があればより面白く演出をすることも必要になるし、「英語小咄」や「英語落語」を発表するための発表会をクラス内や学年、はたまた学校全体で開催することで新しいイベントにもなり得る。まさに「英語落語」は「アクティブ・ラーニング」型の授業にうってつけである。

注

1.「中学校改訂版教科書の教材トピックリスト」『英語教育』　第 64 巻 12 号（2016 年 2 月号）　大修館書店 26-27.

2. *New Horizon* ではこの綴字を採用している。

3.「教科書編集担当者に聞く一押し教材・改訂ポイント」　『英語教育』　第 64 巻 12 号（2016 年 2 月号）大修館書店　31.

＜参考文献＞

笠島準一ほか (2016)　*New Horizon English Course 2*. 東京書籍

新里眞男ほか (2016) *Sunshine English Course 2.* 開隆堂出版

根岸雅史ほか (2016) *New Crown English Course 3.* 三省堂

藤澤良行（2009）「英語落語で音読＜楽＞習」『TOEFL メールマガジン』 Vol. 79 (2009 年 7 月) http://www.cieej.or.jp/toefl/mailmagazine/mm79/learning-info-01.html （2016 年 9 月 6 日取得）

藤澤良行 (2013). 「『英語落語』が授業にやってきた—中学校検定教科書における使用例を考察する—」『樟蔭学園 英語教育センターフォーラム』第 2 号. 8-12.

松本茂ほか (2016) *One World English Course 3.* 教育出版.

『英語教育』 第 64 巻 12 号（2016 年 2 月号） 大修館書店